

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第43号 2018年7月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室  
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

|  |       |    |
|--|-------|----|
| コラム 早大勤労報国際『稲影』創刊号(昭和20年7月中旬)<br>を手にして                 | 谷本 宗生 | 2  |
| 逸話と世評で綴る女子教育史(43)<br>—神戸ホーム開設までの経緯—                    | 神辺 靖光 | 5  |
| 『文京区史[70年史]』の教育史を担当してⅢ<br>—バブル崩壊・高齢化と区政(1991~1999年)から— | 谷本 宗生 | 9  |
| 近代日本における大学予備教育の研究(36)<br>—二年制予科併置の理由 同志社大学⑦—           | 山本 剛  | 12 |
| 教育史研究の周辺②<br>学校を經由した社会移動研究(族籍編)                        | 加藤 善子 | 16 |
| 河合榮治郎の「女性の教養」観②  | 末松 亜紀 | 20 |
| 大阪市の女子教育⑩ —西華高等女学校専攻科から<br>女子専門学校への「昇格」運動・その1—         | 徳山 倫子 | 24 |
| 教育史研究のための大学アーカイブズガイド(13)<br>—信州大学大学史資料センター—            | 田中 智子 | 27 |
| 教育における自治(12) 石田雄『自治』を読む(11)                            | 富岡 勝  | 30 |
| 我流・文献紹介(4) —『学監考案日本教育法』と<br>土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』—        | 神辺 靖光 | 33 |
| 刊行要項(2015年6月15日現在)                                     |       | 36 |
| 短評・文献紹介  |       | 37 |
| 会員消息   |       | 38 |

コラム  
早大勤労報国隊『稲影』  
創刊号(昭和20年7月中  
旬)を手にして

たにもと むねお  
谷本 宗生  
(大東文化大学)

このたび、古書店(泰成堂書店)を介して、早大勤労報国隊『稲影』創刊号(昭和20年7月中旬、縦27.0×横19.5cm、紐綴じ60頁)を幸運にも入手することができた。創刊された時期や勤労学生らを取り巻く情勢などを踏まえると、とても歴史的に貴重な第一級の学生関係資料(手書き回覧雑誌)であるといえよう。そこで少しばかりであるが、資料の概要をご紹介しますと思う。

冒頭の「創刊に当って」(豊永生)では、「吾人身、輝ける稲門に置く学徒として既に数星霜を経来り、今茲に国家の命ずる所、勇躍学業を抛ち日本火災に勤労挺身しつつあるのである。…即ち当会社に出勤する所以なるものは、単なる個人的恣意に依る就職でもなければ、又趣味的な職業見習ひでも無い。飽く迄も早大学徒として集团的に勤労報国の理想の下に職域に挺身しつつあるのである。…然し今、やうやう鎮かにわが身をふり返つて見ると何か淋しいものがあるのでは無からうか。学問に対する思慕?早稲田に抱く郷愁?或は書物に寄せる愛着と、さう云つた学徒としての本来的なあるものに対する憧憬の情(こころ)である。かくてお互が抱く感情が何時しか、われわれのこの『稲影』を誕生せしめた直接の原動力となつたのである」(5~7頁)と、雑誌刊行に至る動機を述べている。「何等かの言はんと欲すること、書かんと欲することがあるに違ひない。かかる感慨なり、詩歌なり、鬱憤なりと遠慮なく発散せしめることも亦、われわれ青年に許された特権として愉しまうではないか。さればこのささやかな回覧雑誌こそ、われわれの友情の絆をより鞏くし、明日の勤労の一助にともなるであらう」(7頁)と、「随筆・小品」や「詩・短

歌・雑」といった内容全般を率直に記すことをいき高く宣言している。

「下宿雑話帳」(岩井明)では、「私はそれまで親の愛情心ありて育ぶまれて来たがいよいよ兄と二人で東京に残留。商学部の学生として、戦时下勉学に励んで参り、現在に及ぶ。本年三月迄戸塚第一国民学校の附近へ下宿し、毎日楽しく登校した。…兄も、四月迄軍医病院勤務していた頃は一緒に寄宿出来てうれしかったが、五月下旬、熊本の某部隊へ赴任今は一人淋しく新井薬師駅附近の下宿で自炊生活している現況である。…空襲のため中野区の新井町で下宿宅も被害を受け幸ひ自炊道具、寝具、書籍のみ傷[つく]なれど、兄の医学書、鏡台、一部の勝手道具約十一個焼けてしまった。壕をもつと深く深く掘るべきであつたと思つている。村上君と一緒に下宿したのは最近で、彼も罹災我も罹災にして彼は今帰省中なり。私も帰省したい[と]かは山々なれど、日本火災へ出勤動員中仕事をやめて帰へる気にはなれず、むしろ東京へ残留し、あくまで頑張つた方が親として[も]喜んで頂けると思ふからである。戦災者となり、下宿生活も大変な苦勞です」(13～14頁)と、戦時下における下宿生活について吐露している。そして「諸君、よろしくお願い致します。吾等は早大学徒義[勇]隊であり、しつかりと励んで呉れよ。而して早大の名誉のため思ふ存分仕事に邁進あれ。下宿生活で独り淋しく思ふままに述べたが、外にいろいろな事があり今考へが浮んで来ず、いづれ又の折述べさせて頂きます。頑張り通し勝利の日まで、下宿生活を通じて敢斗致します。([昭和]二〇[年]、七[月]、十[日])」(14頁)と、自身の思いを結んでいる。ただ本文裏面に、皮肉めいて「指導者には天性あり。君指導者としての天性ありや。青年は感情を第一とす。学友の心情をくみ、然る後何事もなせ」と記しているのである。

「編集後記」(水谷生)とし、「稲影第一号を皆様のお手もとにお送り致します。随筆、小品、又詩・短歌と諸兄の御熱心なる御努力により、第一号が予想以上に充実した内容を以て、出来上つたのは、何より喜ばしいことと思ひます。…今我々是一个の大なる想ひ出の歴史一勤勞挺身一の第一頁を築きつあります。此の想ひ出を一層心良き且つ又有意義なものとし、人生詩帳の一章を飾らんとして、諸兄の御賛同を得て始めたのがこの稲影であります。諸兄よ!!今後益々我等が稲影の生成発展を計らうではありませんか」(53～54頁)と、刊行の喜びを挙げている。そして巻末には、数名の「読后感想」として、「もう少し楽な気持の作品をのせたら如何でせうか。此の雑誌の使命が我等の精神的結合にあるとしたらもつと心の琴線にふれるもの本当に同感し合へるものが必要だと思ひます」(56頁、T生)、「ケチ臭いことをせず、景気よく紙を使つて下さい。ドーセ会社の紙なんですカラ……。殊に六かしいエツセー等、さう書いてくれないと、考へつつ読めないで、目だけで一覽して了ひさうです」(60頁、Y.P.T)などを記している。学徒らお互いに正直な意見を出し合える関係性は、国策第一な戦時下でも回覧雑誌をみる限り構築されていたのだろう。

**\*このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

## 逸話と世評で綴る女子教育史(43)

### —神戸ホーム開設までの経緯—

かんべ やすみつ  
神辺 靖光(ニューズレター同人)

のちに日本組合基督教会になるアメリカンボードミッション American Board of Commissioners for Foreign Missions は明治2年、グリーンD・C・Greeneを日本に派遣した。彼は宣教師のいなかった神戸に向かい、明治7年、アメリカンボードの摂津第一基督公会を開いて、その仮教師になった。彼は神戸を中心に京阪神の伝道を目指としてミッション本部に宣教師の派遣を要請した。来日した宣教師の中にデヴィス J.D.Davisがいた。



J.D.Davis

デヴィスは陸軍大佐として南北戦争に従軍したが、戦争が終るや剣を棄ててバイブルをとり、ワイオミング州のシャイエン教会の牧師になった。彼は日本人が福音の恩恵に漏れていると聞き、毎夕、太平洋に向って日本人への布教を誓った。1867年秋、彼はボストン郊外で開かれたアメリカン・ボードの年会で情熱的な一人の日本人に会った。新島襄である。ここで二人は日本人へのキリスト教布教に奮闘することを誓った。

明治4年12月、デヴィスは神戸に住み、翌5年8月、神戸に一箇の英語学校を開いたところ忽ちのうちに100人の生徒が集った。この生徒のうちに後年、大阪に梅花女学校をたてる澤山保羅さわやまほうらがいる。

明治6年3月、アメリカン・ボード派遣のタルカット E.Talcott とダッドレー J.Dudley が神戸に上陸し、デヴィスの家に同居した。タルカットは北米ニューイングランドの生れで当年37歳、ダッドレーはシカゴの生れで当年33歳、ともに教師の経験があるが、二人は未知の間柄であり、

サンフランシスコで乗船の時、はじめて知り合い、互いに励まし合ったという。タルカットはアメリカンボード所属の東部婦人伝道会の資金で、ダッドレーは同じく中



E.Talcott



J.Dudley

部婦人伝道会の資金で派遣されたのである。二人は早速、神戸郊外の花隅村にあった前田兵蔵の家を借りて英語と唱歌の学校を開いた。ところが、生徒が忽ち溢れ、どこかに移らねばならなくなった。一方、デヴィスは伝道活動の途上、すでにキリスト教信者になっていた旧三田藩主・九鬼隆義くきたかよし(のち華族



九鬼 隆義

令によって子爵)と出会った。この出会いが神戸女学院を生み出すのである。九鬼隆義について述べよう。

九鬼家は志摩国鳥羽を占有した戦国大名である。伊勢水軍を率いて伊予水軍と競う海族＝海賊衆であった。彼らは時に略奪行為もするが、よく天下の形勢をみて海外事情にも明るい。関ヶ原の合戦では当主の親子が東西両軍に分かれて戦い、東軍についた子どもの守隆が安堵されて家督を継いだ。しかし天下泰平を願う徳川幕府の策略で、この海族大名は摂津の山麓、3万石余の三田に移封された。最後の当主・九鬼隆義は幕末期には“書生の如し”と言われて、つましく暮らしていたが、同藩出身の藩書調所教授・川本幸民を通じて福澤諭吉と親密になり、洋学に傾倒していた。鳥羽伏見の戦いでは、家老・白洲退蔵の進言で幕府軍の加勢をやめて三田に帰った。明治2年にはいち早く版籍奉還して三田藩知事となり、大参事になった白洲退蔵の意見で廃刀論や帰田論を主張して藩士を帰農させた。廃藩置県後、三田から神戸に移り住み、不動産業に転じて巨利を得ると同時に、進んで自ら断髪洋装となって洋式生活を周囲にすすめた。やがて福澤のすすめで輸入貿易業にも乗り出すが、九鬼の話はここで止めよう。

花隅村の前田家で開いた英語と唱歌の学校はすぐに満杯になったので、タルカットはデヴィスに学校の移転先を相談した。デヴィスは九鬼に伺い、その斡旋で、神戸北長狭通り(現阪急三の宮駅西側一帯)の白洲退蔵宅地に決った。白洲は九鬼家の家老であった。三田藩が三田県になってからは、県大参事、常に九鬼隆義とともにあったから、隆義が不動産業で神戸周辺を買いまくった時、ともにこ

の土地を買ったのであろう。因みに第2次大戦後、被占領下の日本を独立に向うべく占領軍司令部と交渉した内閣総理大臣・吉田茂の秘書として直接実務に当った白洲次郎は、この白洲退蔵の孫である。

明治7年4月、タルカットとダッドレーの教室は北長狭通りの白洲退蔵宅地の一屋に移った。5月、ダッドレーはデヴィスとともに伝道のため、三田に出かけた。三田では九鬼夫人のもてなしを受け、夫人の懇願で三田の少女たちの教育を神戸ですることになった。ここにおいて、彼女らの学校は寄宿舎づきの設備の整った学校でなければならなくなった。

タルカットは新しい土地に学校建設の意を固め、アメリカンボードの本部に願いでた。本部はその趣旨には賛成するものの、資金調達に難色を示した。しかしタルカットはあきらめず、神戸伝道区の宣教師グリーンとともに各地の団体に呼びかけ、米国中部婦人伝道会から4,700ドル、東部太平洋婦人伝道会から500ドル、九鬼隆義はじめ日本人有志から800ドル相当の日本円、計6000ドルを集めた。この資金によって明治8年3月、神戸山本通諏訪山のふもとに2000余坪の敷地を購入し、直ちに建築に着手、10月には木造二階建150坪の西洋館一棟が完成し、「神戸ホーム」と命名した。敷地建物合わせて6,080円、当時1ドル1円強であったから寄付金全額でまかなえた。これが神戸女学院大学のはじまりである。

参考文献『神戸女学院80年史』  
『同志社50年史』  
比屋根安定『日本基督教史』



# 『文京区史[70年史]』の教育史を担当してⅢ —バブル崩壊・高齢化と区政(1991～1999年)から—

たにもと むねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

今回は、第4章のバブル崩壊・高齢化と区政(1991～1999年)を紹介したい。「昭和五十年代に入ると、女性の社会進出などに伴う晩婚化や夫婦出生児数の減少、未婚・非婚率の上昇などを背景として出生率が低下し始めた。平成元(1989)年には、合計特殊出生率が1.57となり…この『1.57ショック』を契機として、少子化問題は、社会的にも政策的にも大きな問題として認識されるようになった。…文京区立小・中学校ももちろん例外ではなかった。…学校週五日制の段階的導入、(平成四～十四年度)を背景として、学校・家庭・地域社会の連携による新たな教育のあり方がクローズアップされてきた」(同上書、639～641頁)と、少子化時代の到来を述べている。

1997年6月、区議会第二回定例会にて学校設置条例が改正され、真砂小学校と元町小学校の統合が決まる。「統合校の校舎は、旧真砂小学校の敷地に、オープンスペースや仕切りのない教室など、快適で高機能、多機能な教育環境をめざして建設することが決まった。新校舎完成までは旧元町小学校を仮校舎として使用することになったが、統合時の児童数に対応した教室改修や給食調理室の整備などの改修が必要であったため、統合当初から平成十一年三月まで旧真砂小学校校舎を使用することとした。平成十一年四月から平成十三年十二月まで仮校舎として旧元町小学校を使用し

たのち、平成十四年一月、現在地の新校舎で授業を開始した」(646～648頁)とする。

同様に1997年6月、第二中学校と第四中学校の統合も決まる。「旧第二中学校を改修して使用するものとされ、体育館については、教育環境の整備と耐震性の問題から、旧第二中学校の第二校庭に新たに建設することになった。できる限り校庭を有効に利用するため、体育館とプールは立体化され、校舎西側の一時開放の遊び場も学校用地として使用することになった。平成九年度から第二中学校と第四中学校には週一～二日勤務の学校教育相談員が配置された。平成十年四月、第一次適正配置による統合校として本郷小学校と本郷台中学校が開校した」(648頁)とする。

さらに1995年1月には、阪神・淡路大震災が発生し、「同年三月の区議会第一回定例会での『全小・中学校を防災拠点化し災害に強いまちづくり推進を』という声を受け、遠藤正則区長は、学校併設の防災備蓄倉庫を全校に拡大配置し、学校を防災拠点と位置づけることを明確に述べている。被災した神戸市・芦屋市の児童生徒ら四人を区立の小・中学校で受け入れるとともに、以後、地域防災計画を大幅に見直し、学校での防災教育も強化した。また、阪神・淡路大震災での犠牲者の多くが建物の崩壊によるものであったことを受けて、昭和五十六年以前の旧耐震基準の状態であった小・中学校および幼稚園の校舎について、緊急耐震診断を実施し、一定の基準に満たない校舎の耐震補強工事を実施することにした。工

事は順次行われ、平成二十四年度までにすべて終了した」(641～642頁)と述べている。1996年2月、心の教育を基盤とした新しい教育ビジョンを策定し、幼稚園1園、小学校2校、中学校1校を対象に「新教育ビジョン推進校」を募集して、2年間研究指導を行っている。その特色ある取り組みは、啓発誌として発行している『かがやく心』に掲げ、学校関係者らに周知している。

# 近代日本における大学予備教育の研究(36)

## 一二年制予科併置の理由 同志社大学⑦一

やまもと たけし  
山本 剛(早稲田大学)

はじめに

個別大学予科については、二年制から三年制の課程に修業年限を延長した大学、または新たに二年制、あるいは三年制の別課程を併置した大学があることはすでにふれた。

なお、本レター(第25号)で確認したように、私立大学は戦前期を通じて28校が設立されたが、このうちの25校が設立された1933(昭和8)年の時点では、三年制と二年制を併置する大学予科が、10校(早稲田・明治・法政・中央・日本・同志社・専修・立命館・関西・拓殖)、三年制だけ設置のものが9校(慶應義塾・東京慈恵会医科・龍谷・大谷・立教・立正・駒沢・日本医科・大正)、二年制だけ設置のものが6校(国学院・東京農業・高野山・東洋・上智・関西学院)となっていた。

これら個別大学予科のなかには、設立時には二年制だった課程を三年制に延長した東京慈恵会医科、立教、日本医科、または、設立時には二年制を設置していたが、新たに三年制の別課程も併置した明治、法政、日本、専修、拓殖、立命館、一方で設立時には三年制を設置したが、新たに二年制の別課程も併置した早稲田、中央、同志社、関西などがあり、大学予科は、その設置形態において、個別大学の事情が異なっていた。

筆者は個別大学がどのような論理や背景で、このような予科の措置を行ったのかについての全体的な考察が、私立大学予科研究において重要な課題であると考えている。

二年制から三年制の課程に修業年限を延長した東京慈恵会医科大学と立教大学については、本レターで明らかにしたように特に「外国語」の学習が、「到底三年制修了者」に及ばないことを理由とした東京慈恵会医科大学<sup>1</sup>、または「予備智識ノ不足」が「直ニ学部ノ学習上ニ影響」していることを理由とした立教大学<sup>2</sup>のように、2年間の予科では大学教育のための基礎学力が足りないというのが、修業年限延長の主な理由であった。

こうしたなかで修業年限を延長するのではなく、新たに別課程を併置した大学はどのような理由であったのだろうか。

本号では、三年制のほかに、新たに二年制の別課程を併置した同志社大学予科を検討する。

### 同志社大学予科二年制併置

同大学沿革史には、学内で1921(大正10)年頃から二年制予科設置の採否が論議され、1933(昭和8)年に二年制を併置したことが記載されている<sup>3</sup>。なお、二年制併置以後は、三年制は第一部(定員240人)、二年制は第二部(定員360人)であり、定員は二年制のほうが多かった。

同大学予科二年制併置の詳細については、これまで沿革史等で明らかにされていなかったが、同志社社史資料センターには、『同

志社大学予科二年制併置関係書類綴 昭和六―七年』が所蔵されており、同書から同大学の二年制予科設置の理由が把握できる<sup>4</sup>。

本レターでは同書を検討する。

1931(昭和6)年7月6日付で同志社大学予科長日野真澄は同大学総長 大工原銀太郎に「二年制予科併置建議案」を提出した。

同大学では、同年5月13日に「学制改革調査委員会」を開き、6月3日から7日までの5日間、2名の委員が上京して早稲田、慶應義塾、明治の諸大学を調査した。

その後、6月8日に委員会を開催して、「慎重審議ノ結果」、翌日9日の教授会で、二年制予科設置を可決して、同建議案を提出した。

この建議案は「新タニ二年制予科ヲ併置シ来年度ヨリ施行セラレシコトヲ建議」するとして、その理由を以下のように説明している。

はじめに同大学予科の志願者が「一般経済界不況ノ影響」により、「漸減ノ傾向」であるので、同志社は二年制予科を併置しなければならないと訴えた。

そして、東京の早稲田、明治、法政の予科が三年制と二年制を併置していることをあげて、特に早稲田は「本年度一般ニ志願者数減少セルモ減少ノ程度ハ殊ニ三年制予科ニ於テ甚ダシク(二割五分ノ減少) 二年制予科ハ其影響ヲ受クルコト少シ(一割弱減少)」として、三年制と比べて、二年制の志願者の減少は僅かであると述べた。さらに明治も同様の傾向であり、今後、明治は二年制予科のみを在置する意向であると関係者から伝えられた、と付け加えている。

すなわち、大学予科の志願者が減少するなかで、三年制と二年制を併置している早稲田や明治では志願者が減少しても、二年制志願者の減少は僅かであるので、同志社も二年制の予科を設置すべきであるというのである。

次に同建議案では、京都近郊の私立大学との関係があることが述べられている。それは次号で検討する。

注

-----  
1「予科修業年変更理由」『東京慈恵会医科大学』(3A 9-2 118) 国立公文書館蔵。なお、同申請書は1928(昭和3)年1月7日付である。

2「学則改正認可申請書」『立教大学』(3A 10-4 1262)国立公文書館蔵。なお、同申請書は1927(昭和2)年1月28日付である。

3『同志社百年史』通史編1(1979年、同志社)、841頁。

4『同志社大学予科二年制併置関係書類綴 昭和六-七年』同志社社史資料センター所蔵。

## 教育史研究の周辺②

### 学校を経由した社会移動研究(族籍編)

かとう よしこ  
加藤 善子(信州大学)

#### 社会移動研究

社会移動研究は社会学において大きな位置を占める分野であるが、教育社会学では特に学校を経由する社会移動研究がおこなわれてきた。近代日本においては「身分から能力へ」の転換が、まさに学校制度によって行われただけに、「誰が学校へ進学したか」「学校を出た後に誰がどこへ行ったか」を解明することは、日本の近代化を検証することでもあった。

社会移動研究は、個人の①出身階層・階級、②学歴、③到達階層の3地点を結んで分析をし、社会移動にどのような要因が影響するのかを分析するものである。戦後は、SSM調査として10年ごとに全国規模で調査が実施されており、日本での階層分布や社会移動の状況を60年にわたって知ることができる<sup>1</sup>。

戦前の状況を知ることは非常に難しく、断片的な史資料をつなぎ合わせて少しずつ全体像へと近づくしかない。その断片的な作業は遅々としたもので、あるフィールドにおいて得られた知見を一般化することには慎重になる必要はあるが、これまでの発見に照らし合わせていくつかの通説と言われるものがつくられてきた。

#### 「土族から平民へ」

近代日本においては、中学校への進学が重要な分岐点であると



考えられており、中等教育機会に注目して進学者の出身階層を明らかにする作業が続けられてきた。最近まで、明治初期では士族が学生の中で高い割合を占めており、明治20年代以降、平民の進出とともに士族は学校教育から次第にしめ出されたという、「士族から平民へ」通説が受け入れられてきた<sup>2</sup>。この通説には、多くの中学校がそれまでの城下町につくられ、結果的に藩校を受け継ぐ形で設立されたいきさつや、武士的エートスと学校文化が親和的であったと同時に、身分社会の名残によって平民が士族との競争を忌避したといった説明によって支えられた<sup>3</sup>。能力主義の浸透によって優秀な平民が進出した結果、相対的に武士が没落したという、まさに近代化における学校の機能主義的な役割を追認するにも便利なものであった。

### 士族の優位性は高まっていた

それに対して、士族は没落したどころか、その優位性をさらに高めていたという園田・濱名・廣田(1995)による実証研究が登場した<sup>4</sup>。士族と平民の多少を示す「割合」として、従来の研究では「占有率」を用いていたのに対し、この研究は「輩出率」を用いたのである。族籍別男子人口は『帝国統計年鑑』、族籍別中学校生徒数は『全国公立尋常中学校統計書』(『梧陰文庫文書』所収)によるもので、それぞれの族籍階層の男子1万人あたりの中学校進学者数を計算している。その結果、占有率では確かに明治23年以降は士族と平民の割合が逆転するが、輩出率では士族が38.4人(明治19年)から162.9人(明治31年)へと拡大しているのだ。平民の輩出率は、

1.9人(明治19年)から15.9人(明治31年)に伸びた程度である<sup>5</sup>。

### 身分制度の再編か、身分制度のスライドか

士族が中学校進学機会において優位性を高めたのは、能力による競争の結果というよりは、身分的な威信を守るためには学校に進学するしかなかったからだというのが園田らの見解である。篠山藩の個別のケースの分析によると、実際に中学校に進学したのは、士族のなかでも江戸時代の身分と経済状況が相対的に上位であった家の子弟であった。生活のために働くことをできるだけ避けたかった家で、かつ実際に働かなくとも良かった家が、「仕事をしない」選択ができた。学校制度の導入がどのような意味を持っており、将来をはっきりと見越したうえで戦略的に進学行動をとったとは考えられず、しかし仕事をするのを避け、先延ばしにして長い時間を学校で過ごしていたら、偶然、社会的に威信の高い職業に就くことができたのだという<sup>6</sup>。

このケースは、下級武士が社会のリーダーになったわけでないことを示している。江戸時代の上級武士が、明治維新・廃藩置県・秩禄処分の後にも結局社会の上層にそのままスライドしたことになる。結局は、学校制度を媒介として、身分が階級に転化したという話だ。

ただ、士族がそれを予測していなかったのではないか、戦略的に行動したのではなく、偶然そうってしまったのではないか、という彼らの解釈は、私にはとても魅力的に映る。集合的無意識がそうさ

せたのかもしれないが。同時に、この研究は十分に評価がされておらず、研究史の中にもうまく位置づいていないと思う。一方で、進学をめぐる熾烈な競争があったという研究も刺激的で説得力があり、これら一連の研究を相対化するのはなかなか難しそうだ。両方の研究成果を同時に説明できる仮説を自分が作ることができればよいのだが、誰かが考えてくれないかと楽しみに待っている。

## 注

---

<sup>1</sup> 「社会階層と社会移動に関する全国調査 (Social Stratification and Mobility)」。概要については、「2015年社会階層と社会移動 (SSM) 調査研究会」のウェブサイト <<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/2015SSM-PJ/>> がわかりやすい。東京大学社会科学研究所 附属社会調査・データアーカイブ研究センターホームページでデータが公開されている (どちらも2018年7月10日取得)。

<sup>2</sup> 士族・平民の教育機会については、麻生誠 (1960) 「近代日本におけるエリート構成の変遷」『教育社会学研究』第15巻, pp.148-162., 菊池城司 (1967) 「近代日本における中等教育機会」『教育社会学研究』第22巻, pp.126-147. などから本格的に研究され始めたと考えられる。麻生 (1960) は、士族のエリート接近性における優位性にすでに触れている。

<sup>3</sup> 天野郁夫編 (1984) 『試験の社会史』東京大学出版会、竹内洋 (1991) 『立志・苦学・出世』講談社学術文庫、斉藤利彦 (1995) 『競争と学校の学校史』平凡社、など多くの研究がある。

<sup>4</sup> 園田英弘・濱名篤・廣田照幸 (1995) 『士族の歴史社会学的研究—武士の近代—』名古屋大学出版会。

<sup>5</sup> 前掲書, pp.218-219.

<sup>6</sup> 前掲書。

## 河合榮治郎の「女性の教養」観②

すえまつ あき  
末松 亜紀(聖心女子大学)

先月号では、河合榮治郎が『(第一)学生生活』(1935年 日本評論社)の「高等学校時代の読書」において発表した文献目録を取り上げた。その中で、原著者(編者と訳者は除く)の男女比較を試み、その結果は原著者全118名中、女性の原著者は野上弥生子1名のみであるという驚くべきものであったことを紹介した。

さて、河合は「昭和教養主義のバイブル」<sup>1</sup>とされた全12巻からなる『学生叢書』(1936-1941年 日本評論社)を編纂、発表して、1930年代の知的青年たちを教養の世界へと導いた教養主義者として著名である。『学生叢書』は執筆者の選択や依頼も河合自らが行き、学者、思想家、芸術家ら総勢180名が執筆した。その中で女性の執筆者は発行順に、『学生と教養』にて野上弥生子「一つの注文」、『学生と生活』にて坂西藤子「我が子におくる」と与謝野晶子「若き人達におくる」、『学生と社会』にて岡田瑛子「結婚」、『学生と芸術』にて櫻田總子「芸術の思ひ出」、『学生と西洋』にて荒木光子「独逸の印象」、以上6名である。

全12巻ある中でも第1巻目の『学生と教養』は、各執筆者が教養論を展開しており、それは読者を教養の世界へと導くという『学生叢書』全体の性格や方向性を示していることから、全巻を代表する格別なものとして位置づけられるだろう。その『学生と教養』で教養について論じ、さらに先述の通り河合の発表した文献目録に女性で唯一作品が掲載された野上弥生子は、河合が思想や作品を非常に高く評価した人物として、とりわけ際立った存在である。

河合と弥生子の接点については、河合の日記によると、『学生と教養』が発表される前年の1935(昭和10)年6月14日「野上弥生子氏の座談会は大変よかった」<sup>2</sup>、7月12日「野上氏の『若き息子』を読む」<sup>3</sup>、7月22日「野上さんの『大石良雄』と『海神丸』とをよんだ。後のものは鬼気人を襲うという感があった」<sup>4</sup>と、3つの記述にとどまっており、『学生と教養』へ執筆を依頼した経緯や面会したことについては記されていない。しかし先述のように、河合は実際に弥生子の思想と作品に触れ、高く評価したことがうかがえる。

野上弥生子(1885-1985)は、1885(明治18)年5月6日に大分県北海部郡白杵町(現・白杵市)に生まれた。白杵有数の醸造家で育ち、小学校の高等科に進学するとともに、国学者 久保千尋の塾に通って『古今集』、『枕草子』、『徒然草』、『日本外史』、『源氏物語』、四書五経の素読など、国文と漢文の手ほどきを受けた。その他にも、作歌や英語の塾にも通った。1900(明治33)年に上京し、女子教育に尽くした巖本善治の主宰する明治女学校に入学、高等科卒業まで6年間を過ごした。明治女学校では原典を教科書として使用しており、英語ではテニスン、エマーソン、カーライル、サッカレー、シェークスピアなど、旧制高等学校生も深く親しんだ人物の著作に辞書を引きながら格闘した。<sup>5</sup>弥生子は白杵で最初の女学生であり、とりわけこの明治女学校での教育歴は、当時の女性としては一流の教育を受けた人物ということを示している。

明治女学校高等科を卒業した1906(明治39)年に、弥生子の英語の家庭教師であった、東京帝国大学文科大学英文科の学生、野上豊一郎(1883-1950)と仮祝言をあげ、その二年後に入籍した。

豊一郎は阿部次郎、安倍能成らと共に夏目漱石門下であったため、豊一郎から聴く木曜会の話に触発されて弥生子も漱石に師事し、文筆活動を開始した。漱石の紹介により、処女作『縁』を「ホトギス」に発表してから小説家としてのキャリアが始まり、三児を育てながら小説の他にもギリシャ神話や海外文学の翻訳、紹介、戯曲や随筆など幅広く手がけた。代表作としては『新しき命』(1916)、『海神丸』(1922)、『真知子』(1928—1930)、『迷路』(1936—1956)、『秀吉と利休』(1962—1963)などが挙げられる。広い社会的視野と文化的教養を統一した作風には定評があり、1971(昭和46)年、数え年87歳で文化勲章を授章した。また1972(昭和47)年には、明治女学校時代を文化史的な視点で綴った自伝的作品である『森』を発表し始めた。高齢にも関わらずみずみずしい小説で、文学者としての長命ぶりを示した。100歳の誕生日を前に死を迎えた(99歳11か月)ため未完のままに終わったものの、生涯現役作家として生き抜いた。<sup>6</sup>



写真は双方とも野上弥生子

- <sup>1</sup>竹内洋 1999 『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社, 243頁
- <sup>2</sup>日記 1935年6月14日(社会思想研究会編 1969 『河合榮治郎全集』第23卷所収, 68頁)
- <sup>3</sup>日記 1935年7月12日(社会思想研究会編 1969 同上書, 69頁)
- <sup>4</sup>日記 1935年7月22日(社会思想研究会編 1969 同上書, 70頁)
- <sup>5</sup>岩橋邦枝 2011 『評伝 野上弥生子—迷路を抜けて森へ』新潮社, 34頁
- <sup>6</sup>助川徳是「野上弥生子」三好行雄ほか編 1994 『日本現代文学大事典(人名・事項篇)』明治書院
- 瀬沼茂樹「野上弥生子」日本近代文学館 小田切進編 1977 『日本近代文学大事典 第三卷』講談社
- 藪禎子「野上弥生子」市古夏生 管聡子編 2006 『日本女性文学大事典』日本図書センター
- 岩橋邦枝 2011 前掲書

## 大阪市の女子教育⑰ — 西華高等女学校専攻科 から女子専門学校への「昇格」運動・その1 —

とくやま りんこ  
徳山 倫子 (京都大学)

本連載では、大阪市立大学家政学部の前身となった戦前期の女子教育機関について検討してきたが、ニューズレター第26号(2017年2月)を最後に筆者都合により連載を休止していた。これまでの連載では、職業学校であった大阪市立高等西華女学校について述べてきたが、同校のその後の変遷について今回は述べていきたい。

ニューズレター第22号(11-12頁)で述べたように、1925(大正14)年時点の高等西華女学校には、4年制の本科と、1~3年制の高等科が設置され、高等科の生徒は結婚の時期や得たい資格に応じて在学年数を自由に選択することができた。しかしながらその後、高等科の1年課程については応募者が皆無に近くなったために1932(昭和7)年に廃止され、2年課程の生徒も減少し、3年課程を選択する生徒が増加したことから、同校の特色であった各課程間の互換性の存在理由がなくなっていった<sup>1</sup>。

同校は1941(昭和16)年に高等女学校に改変され、大阪市立西華高等女学校となった。この際に本科の修業年限は5年になり、高等科は3年制の被服専攻科となった。本科・専攻科の相当学年には試験を経て生徒が編入された<sup>2</sup>。

終戦後の1946(昭和21)年には被服のみであった専攻科に英語科(1学年定員40名)が増設されたが、これは、専攻科への進学



志願者増に対応するためのものであった。被服専攻科が設置されてからの志願者は募集人数40人に対し、1942(昭和17)年度は145人、1943(昭和18)年度は196人、1944(昭和19)年度は145人、1945(昭和20)年度は266人であり、競争率は3.6～6.7倍になっていた<sup>3</sup>。専攻科への進学難について、英語科設置に際して作成された「本校経営案」には以下のように綴られている。

各女学校ノ優等卒業生ニシテ入学スルコトヲ得ズ。男子ナラバ悠々一流ノ高等学校ニ入学シ得ベキ資質ヲ有スル程度ノ優秀ナル女子ガ入学シ得ザル有様ナリ。而モ本校本科ヨリノ志願者ニ対シテハ、毎年ノ志願者ノ質ヲ考慮シテ入学ノ見込ミ少キ者ニ対シテハ予メ志願者ヲ断念セシメツツアリ<sup>4</sup>

同校の専攻科には他の女子中等学校の卒業生も志願しているため倍率が上昇し、男子であれば高等学校に入学することができるくらいの資質がある者でも入学が困難であり、そのために内部からの受験を教員が制限せざるを得ない状況であったという。加えて、今後の志願者の動向については、以下のように予想されている。

戦争終了ト共ニ多数ノ工場会社ハ縮小シテ人員ノ需要ハ頓ニ減少セル上ニ多数ノ復員者アリテ女子ノ就職ハ甚ダ困難トナレリ。依ツテ女学校卒業後直上級学校ニ入学ヲ志願スル者ハ今後増加スルベシ。現在各女学校ニ補習科生ノ可ナリ多数在学セルヲ見ルハ女学校卒業後上級学校ニ進マントスル者多キ

ヲ物語ルモノナリ。(中略)今後女子ノ地位向上ヲ自覚シテ女  
学校卒業者ニシテ上級学校ニ進マントスルモノノ増加スルハ  
看取ニ難カラズ。(中略)今後本校専攻科ノ入学志願者ハ減少  
セザルノミカー層増加シテ一層入学難ノ激化スルハ火ヲ見ル  
ヨリモ明カナリ<sup>5</sup>

このような背景から英語科の設置が進められたが、同校ではこれ  
にとどまらず、女子専門学校への「昇格」を目標として掲げるよう  
になった。1946(昭和21)年9月末には、「大阪市立西華高等女学校  
専攻科昇格促進趣意書」が大阪市の教育部などの関係当局者に  
提出されたが、これについては長文になるため、次号に掲載する。

## 注

---

<sup>1</sup> 大阪市立大学百年史編集委員会『大阪市立大学百年史全学編  
上巻』大阪市立大学、1989年、301頁。

<sup>2</sup> 同上書、301-302頁。

<sup>3</sup> 同上書、303-304頁。

<sup>4</sup> 同上書、304頁。

<sup>5</sup> 同上。

# 教育史研究のための大学アーカイブズガイド(13)

## —信州大学大学史資料センター—

たなか さとこ  
田中 智子(早稲田大学大学史資料センター)

今号では信州大学大学史資料センターを取り上げる。同センターは昨年(2017年)設置された国立大学アーカイブズである。設置されたばかりということもあり、今号では構成を変えて、その(1)基本情報および(2)現在の活動状況について述べていく。

### (1)基本情報

信州大学大学史資料センター(以下、センター)は2017年4月、松本キャンパスの信州大学中央図書館内に設置された。センターは図書館の附属機関として位置づけられ、センター長は図書館長が兼務し、「センターに関する事務は、附属図書館事務部の協力を得て」行うなど<sup>1</sup>、図書館と一体の組織となっている。その設立の趣旨は、信州大学が1949年に設置されてから「はや70周年を迎えようとしている」が、「大学史における貴重な資料が、現状では廃棄・散逸の危機に瀕している」ため、「資料の収集・整理・保存をする機関を設立する」ことであった<sup>2</sup>。この趣旨に基づき、センターは現在、①周年記念事業の準備を進めるとともに、②歴史資料の「収集・整理・保存」、③「アーカイブ構築」、④「公開、展示等」の業務を行っている<sup>3</sup>。

業務日時は月曜から水曜の9時から16時までである。連絡先は文末に記しておくが、電話等の対応も上記時間に限られるので、ご注意いただきたい。

## (2)現在の活動状況

まず①周年記念事業の準備についてであるが、これがセンターの現在の主たる業務となっている。その理由は、来年(2019年)が信州大学創立70周年および旧制松本高等学校創立100周年にあたるからである。来年6月1日には松本市民芸術館を会場に「信州大学創立70周年・旧制松本高等学校100周年記念事業」が行われる予定となっており、その中でセンターは「信州大学前史【旧制松本高等学校から信州大学文理学部へ】及び最近の取り組み」に関する映像制作や、旧制松本高等学校及び信州大学に関わる資料の展示会(実物展示、映像展示)を実施することになっている<sup>4</sup>。このため、今年度はこれに向けての準備を中心に業務を行っている。

次に②歴史資料の「収集・整理・保存」についてであるが、信州大学は周知の通り、長野・上田・松本・伊那にキャンパスが分散しており、それぞれ前身校も異なっている。このため、法人文書等の保存は原則として各キャンパスで行い、センターはその現状調査に努めている。また、教職員・同窓生に呼びかけるなどして、学内外の資料の収集を積極的に推進している。昨年度収集した資料は、今年3月13日現在で1,380点(卒業生:1,199点、教職員181点)となった<sup>5</sup>。

こうして調査・収集した資料は③「アーカイブ構築」や④「公開、展示等」に活用されている。③については、センターホームページ上に「ご提供いただいた資料の紹介」コーナーを設け、データで閲覧できるようになっている<sup>6</sup>。④については、今年2月から3月、4月

から5月の二期に分けて、第1回企画展示「信州大学の今昔」を開催し、各学部等に所蔵されていた資料を展示した。

以上、信州大学大学史資料センターの現在の活動状況について紹介してきた。「現在の」としたのは、次年度、周年記念事業が終了した後に「活動の総括、及び今後の展開と組織の見直しの検討」が行われる予定だからである<sup>7</sup>。同センター特任教授の福島正樹は今後の展望について「身近な資料をこつこつと集める「収集アーカイブズ」の仕事と、大学の存在そのものをアーカイブする「機関アーカイブズ」を両輪とする信州大学アーカイブズへの発展を展望したい」と述べている<sup>8</sup>。同センターの今後の発展に期待したい。

電話:0263-37-3531

FAX:0263-37-3532

メール:archives@shinshu-u.ac.jp

(つづく)

- 1 「信州大学大学史資料センター規程」第7条
- 2 福島正樹「信州大学大学史資料センターの設置とその活動」(『信州大学附属図書館研究』第7号、2018年1月)p183
- 3 前掲1 第3条
- 4 前掲2 p194
- 5 前掲2 p190
- 6 信州大学大学史資料センターHP(<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/archives.html>)
- 7 前掲HP掲載の「事業計画の概要」による
- 8 前掲2 p195

## 教育における自治(12) 石田雄『自治』を読む(11)

とみおか まさる  
富岡 勝(近畿大学)

前号では、大正期に出てきた「立憲自治」論にかかわりのある自治団体が、昭和初期にどのような状況になっていったかについて石田雄の著書『自治』を通じて紹介してきた。それは要約すれば次のようになるだろう。

治安維持法や瀧川事件などといったデモクラシー退潮の流れのなかで、大正期の自治論は「団体自治」を軽視する面があったため、権力への抵抗ではなく依存する傾向が強まり、「内における『自治』の弱さ」という欠点をもっていたために、組合運動では一度指導者の転向が行われると運動全体の右傾化が止まらなくなるなど、「自治」的団体が弱体化し、国家総動員体制へ吸収されていった。

このように石田は、「立憲自治」論が「団体自治」の軽視と「内における『自治』の弱さ」という特徴をもっていた点に注目していたといえる。

### 大島正徳『自治公民の根本義』

では、大正期の自治論において「団体自治」と「内における『自治』」が弱かったというのは、具体的にどのようなことだったのだろうか。これについて、石田が『自治』で紹介している大島正徳の『自治公民の根本義』(1927年)<sup>2</sup>が手がかりになりそうだ。大島の『自治公民の根本義』(1927年)は、石田によって以下のような点が紹介されている。

- ① 「自治公民」というように自治を公民と結び付けて把握していたこと。
- ② 「公民」を伝統から自由な個人としてとらえ、「公民」の横の連帯によって「自治制乃至立憲制」を支えていこうとしていたこと。

③ 「自治」における個人の役割を「個人自治」として重視していたこと<sup>1</sup>。

これだけを見ても大島は「自治」に関しては詳しく考察した人物であるように思われる。そこで、本号から数号を使って、大島正徳『自治公民の根本義』の本文を分析してみたい。なお、大島正徳(1880-1947)は、同志社中学校、第一高等学校で学んだあと東京帝国大学文科大学で哲学を専攻した哲学者、教育者である。東京帝国大学助教授、東京市教育局長として活躍した後、に本書が刊行されている。

### 立憲自治のもとでの自治公民の精神的自覚

大島は本書を通じて自治公民の精神的自覚について詳しく述べているが、自治公民の精神的自覚の必要性について、序論において次のように述べている。

現代は、立憲自治の制度の下に、我々の生活する時代である。然らば、それについての自覚を深うし、それに適応する教育の施さなければならぬことは、いふまでもない<sup>3</sup>。

遺憾ながら、その形は整つても、その心はいまだに備はつてはゐない。この数年来、公民教育が唱へられ、自治訓練が叫ばれ、立憲思想に関する社会教化が努められるに至つたことは、喜ぶべき現象ではあるが、更にこれを一度深き所から基礎づけ、更にこれを徹底的に善く国民意識の内に植ゑつけなければ、制度組織の外形に囚はれて、ただに、その経済的及び心理的能率をあげ得ざるのみか、国民精神の純真性を滅

却し、国家を内部より衰亡せしむる憂ひなしとしないのである。かの政党は私党化し、議員は利権屋化し、役人は傀儡化し、民衆は雷同化し、政権の授受は陰謀化し、道徳も教育も政争の具に供せられるかの感あり、且つ社会連帯とは相互責任転嫁の代言の如きうらみある現代に於ては、個人並に自治団体乃至国民の独立的人格としての生長発展をみることは、甚だ覚束ない。故に自治公民の精神的自覚を喚起することの必要は、今日より大なるものはないのである。」<sup>4</sup>

本書が刊行された1927年には、第二次護憲運動を経て1925年に普通選挙法が制定され、1924年には実業補習学校で公民科の教授要項が公布されるなど、立憲政治の制度が充実し、公民教育がスタートしていた時期であるが、大島は立憲政治や公民教育の外形だけ整えても、「自治公民」の精神的自覚がなければ、「立憲自治」は社会連帯ではなく、責任転嫁などの政治的墮落・腐敗を生んでしまうと批判している。

では、大島のいう「自治公民」の精神的自覚はどのようなものなのか。それは、「団体自治」や「個人自治」についてどのように捉えていたのか、について次号で検討していきたい。

.....

- 1) 石田雄『自治』三省堂、1998年、56頁～57頁。
- 2) 大島正徳『自治公民の根本義』至文堂、1927年。なお、1940年にも改訂版が出されているが、本号では1927年版を扱う。
- 3) 同前掲書、1頁。
- 4) 同前掲書、1頁～2頁。



## 我流・文献紹介(4) —『学監考案日本教育法』と 土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』—

かんべ やすみつ  
神辺 靖光(ニューズレター同人)

『タビット・モルレー申報』のほかに『学監考案日本教育法』と『学監考案日本教育法説明書』というものがある。東京書籍の東書文庫に所蔵されていた文書であるが、昭和36年、風間書房から刊行された『明治文化資料叢書第8巻教育編』に収められている。

『明治文化資料叢書』は国会図書館が現在地に開館するに当って、各地の図書館、文庫等の中から貴重な文献を移籍させることが起った。その際、改めて発見された稀覯書を取めようと小汀利得、金森徳次郎、木村毅が刊行代表者になってつくられた叢書である。第1巻産業編、第2巻経済編と次第して第8巻教育編…第12巻新聞編で終了した。教育編は35種の貴重な文献資料が収められているが、1「学制」制定関係資料、2「教育令」制定関係資料、3「学校令」関係資料、4井上毅・牧野伸顕文書類、5高根義人「大学制度管見」、6民間教育運動関係資料の6に分類収録されている。明治期の教育史を研究するならば、いずれも必読の文献と言わねばならない。

これら史料の収集、編集と解題執筆は明治期歴史の大家・大久保利謙先生が行った。大久保先生は明治の元勳・大久保利通の曾孫である。私はかつて国土館大学の教育史研究室で机を並べたことがある。時折、私の質問に答えて下さる先生はまことに碩学と呼ばれるにふさわしい見識と風貌を持たれた方であった。『明治文化叢書第8巻教育編』の「教育令」制定関係資料解題は簡にして要を得たわかり易いものである。

このマレーの「学監考案日本教育法」及び「同説明書」を用いて「教育令」の制定過程を明らかにしたのは日本大学教授の土屋忠雄先生である。昭和37年、講談社から刊行された『明治前期教育政策史の研究』の「第9章教育令制定の過程」はマレーの「日本教育法」を出発点にしながらも周囲の政治状況によって変化してゆくさまが、よく画かれていて、読者をして教育令の歴史的意味をわからせる快著である。この著書に先立って土屋先生は「明治十年代の教育政策」と題する論文を「野間教育研究所第11輯」に発表している。この論文に学制期の教育政策を加えて『明治前期教育政策史』を完成させたのだが、この論文執筆中はまだ『明治文化資料叢書』は刊行されていない。してみると土屋先生は東書文庫に「学監考案日本教育法」を探し当てて「明治十年代の教育政策」研究をなしとげたものと思われる。

『明治前期教育政策史の研究』は当時さかんになりはじめた明治教育史に一石を投じたばかりでなく新しい視野を開いたことで画期的であった。前回述べたように戦後、明治教育史を盛んにした第一人者は海後宗臣教授である。海後教授は戦前の文部省刊『学制七十年史』から戦後の『学制百年史』までをまとめた教育制度史の権威である。明治の教育制度改革からはじまって戦後の教育改革まで一貫して教育制度の変遷を辿っている。而も取扱う史料は改革に直接かかわった委員達の議事録等で、手堅く、研究の王道を進んだ。これに対し、土屋先生の研究法は改革に関わった人物の言動から当時の政治状況、地方の実状を視野に入れたものである。中でも圧巻は「学制」を廃し「教育令」を成立させるまでの経緯を大久保利通遭難後の権力闘争をめぐって民権派に気をつかいながら伊藤博文が教育令を自由主義的なものにしてゆくくだりである。かくてマレーのつくった重厚な「日本教育法」は田中不二麿の「日本教育令」に変わり、伊藤博文案に変わり、さらに元老院

の修正をへて“自由教育令”と呼ばれた軽量簡単な法令になってしまったのである。これ以降、河野敏謙文部卿の登場と改正教育令に至る件を私は興奮して読んだものである。

はばか  
憚りながら私(神辺)がマレーと土屋先生から影響を受けたことを述べたい。私はかねてから東京都公文書館所蔵の私学開業願書を分析して明治初年の漢学塾・洋学塾の実態を研究していた。これらは東京府の学務課員が雑学と称し、閉鎖させようとしたものである。これをマレーが止めて「各種ノ学校」として「教育令」の学校種類に入れた。このことは「第3次マレー申報」と「学監考案日本教育法」を読めば明らかである。この東京府の私塾の実態と各種学校の成立については私は昭和48年から52年まで年々教育史学会で発表し続けた。会場にはいつも土屋先生がいて、有益な発言をしてくれ、時に激励してくれた。後年、故土方苑子教授が『各種学校の歴史的研究』(2008年、東京大学出版会)を刊行した際、そのスタートは神辺の研究だと言ってくれた。

土屋流の研究叙述法を覚えた私は時の政治状況とその地の実態を組み合わせ、昭和55年の日本教育学会で、「諸学校通則」による府県管理学校のことを福岡県の4中学校を例にあげて発表した。会場に土屋先生の顔が見えた。後日、土屋先生から電話がかかり褒めて貰った。翌年の暮、土屋忠雄先生は亡くなった。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項(2015年6月15日現在)

- 1.(目的)広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
- 2.(記事のテーマ)記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
- 3.(刊行頻度・期間)研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
- 4.(編集委員会・編集世話人)発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
- 5.(執筆者)執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
- 6.(記事の責任)記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくにまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
- 7.(記事の種類・分量)記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
- 8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
- 9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
- 10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
- 11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

木村道子さん(近畿大学建学史料室)の「全国大学史資料協議会西日本本部会2017年度第4回研究会 参加記」(『西日本部会会報』第34号、2018年5月所収)を読みました。研究会の開催地である京都府立京都学・歴彩館を見学体験したうえで、木村さんは自身の勤務と重ねて次のように述べています。「近畿大学では、2025年に迎える創立100周年に向けて、記念委員会が発足し、ようやく動き出したばかりである。…近畿大学にまつわる史資料を展示し、自校学習の実践としても活用している。いずれも、デジタル化が課題」と率直に挙げ、見学先の東寺百合文書に関連して、「昭和42年、文化財保護を目的に京都府が高額で購入した『東寺百合文書』は当時、『紙屑に無駄遣い』と激しく批判されたということである。それが現在では、国内に留まらず、世界的にも史的価値の高さが認められている。これは、アーカイブズ冥利に尽きると大変喜ばしく思うと同時に、背筋が伸びる思いがした。例えば、大学に関する貴重な史資料が大量に発見された時、多額の費用や労力に代えても必要であると判断し、修理・保存を提案できるだろうか。現在扱っている史資料を含め、最良の判断ができるよう、研究業務にまい進したい」と表明しています。たしかに、これは重要な問題提起ですが、果たしてつねに貴重と考え得る史資料に万全の対応が可能なのか、またその判断や対応が一定の評価を支持し得るものといえるのかなど、とても悩ましい問題で一概に回答を下せそうにやはりないだろうと感じます。(谷本)

本ニュースレター第42号(2018年6月15日)の谷本さんの「文京区史[70年史]の教育史を担当してⅡ」で、夏季教育施設のことが取り上げられていた。こうした施設が高度経済成長期に拡充され、バブル期以降は専用施設の充実から民間施設の利用へとシフトしつつある状況が伝わってきた。こうした施設は自然体験だけでなく、集団生活から自治的活動を育成できる可能性もあり、教育的に重要だと思う。他の都内特別区や自治体の状況とも比較するとどうなのだろうか、と興味がわいた。私の出身の名古屋市では市立小学校に通う小学生は、たしか全員が岐阜県中津川市の教育施設に泊まりがけで行っていた。そこで調べてみたところ、現在、名古屋市では「野外活動は、自然と児童生徒との出会いの中で自然を理解させ、仲間と協調して活動する大切さを体験させ、自主自律の態度を身につけさせることにより、豊かな人間性をはぐくむこと」をねらいに、「2泊3日の野外教育を、岐阜県中津川市(対象:小学5年生)と愛知県豊田市稲武町(対象:中学2年生)の「野外教育センター」で、それぞれ実施していることが分かった。<<http://www.city.nagoya.jp/kurashi/category/11-9-3-2-1-4-0-0-0-0.html>>

(富岡)

金沢大学資料館での学生らによる博物館実習の1駒。学生企画展などは、他の大学ミュージアムでもよく行われているだろうが、金大の博物館実習では体験型イベントの試みとして、旧制第四高等学校の時習寮で新入生らに対して先輩寮生らが怪談話を聞かせた「怪談会」を再現し、当時の四高生らのマントや帽子を金大生らが実際に被り、おどろおどろしく怪談話を語るという実習を行っているよし。ただ少し残念な点は、当時の時習寮では語り部寮生らが白装束などに扮し、新寮生らが寝れないくらい本気で怖がらせるなどして、四高時習寮といえば…の恒例歓迎行事であったことを強調してほしいものだ。当時の寮とは、青年らにとって日常とは異なる未知との遭遇が体験できる場でもあったのだろう。(谷本)

また旧制高等学校記念館の夏期教育セミナーの時期になりました。一年間があつという間です。今年も楽しみです。(山本剛)

博士論文は河合榮治郎に焦点を当てて研究しておりますが、最近では日本の女子高等教育の先駆者である津田梅子や、今回ニューズレターでも取り上げた野上弥生子など、女性の教育者や教養人に注目しております。梅子や弥生子の生き方や考え方は、同じ女性として強く刺激を受けます。(末松)

「科研費獲得セミナー」に出席しました。信大はこの10年で採択率が1.8倍になったそうで、国立大学としては良い成績だそうですが、私立大学は2倍以上に伸びており、厳しい状況であることは間違いなさそうです。今度は阪神間の私立中学校の研究で応募したいと思っています(興味のある方はぜひご連絡ください)。(加藤)

石牟礼道子さんの『苦海浄土』を読み、友人と水俣を訪ねてきました。夏空を偽りなく映す青い水面、穏やかな波、岸辺の岩場に騒ぐ多くの生き物たち。水俣病が提起する問題は多岐にわたりますが、強く感じたのは、他者をどれだけ着実に認識し、共感できるか、という点でした。水俣の青い海は、これからも私の眼底

で、多くの問いを与えてくれるように思います。それにどれだけ真剣に向き合えるか…。自らの頭で考え続けたいと思います。(金澤)

今回、信州大学大学史資料センターさんを取材させていただききっかけとなったのは、自分の職場のHPを見ようとして、「大学史資料センター」と検索したら引っかかってきたことでした。先方にその話をしたところ、実はセンター長先生が早稲田の出身で、「大学史資料センター」の名前もうちの職場からとったのだとか。いやはや、自分が知らないだけで、実は色々なところで様々な人・モノがつながっているのだな…と改めて実感しました(笑)(田中智子)

7月6日の大雨の翌朝6時、職場に向かう私の車の前をパトカーが走っていた。次の交差点ではもう一台のパトカーが停止しており、警官がパイロンを持って動いていた。前を走っていたパトカーはそのまま直進し、私も直進しようとしたところでパイロン脇の警官に止められた。交通規制の先頭に出くわしたのだ。職場まではあと500m足らず。何とか通してもらえないかと思い警官に声をかけたところ、「本当にもう信じられんほど山が崩れとるんですわ。信じられんほど。」とのこと。片側2車線の幹線道路が土砂でふさがるとはにわかには信じられなかったが渋々従って迂回路を探した。まさかその後一週間も道路が復旧せず、陸の孤島然として物流の不自由を強いられことになろうとは思ひもしない1日の始まりだった。(小宮山)

教育実習の訪問が続いたあと、1950年代から60年代にかけて京都大学寄宿舎（現在の吉田寮）で事務員として勤務された野田もとさんを偲ぶ会「あじさい忌」が6月16日に京都大学楽友会館で開かれ、参加してきました。寮の職員さんを通じて学年の異なる寄宿舎生がつながっていったことなど、貴重なお話をたくさん聞くことができました。また、前号のコラムで少し紹介した「市民と考える吉田寮再生100年プロジェクト」の募集が始まりました。これは、京都大学の吉田寮生を中心としたプロジェクトで、築105年の木造寄宿舎「吉田寮」の再生デザイン提案作品を募集するもので（応募締切9月13日）、見学会や作品展示会などが予定されています。寮の建築的・文化的価値や、自治的な生活に関する市民との対話につながるかもしれない試みとして、元寮生の一人として注目しています。詳細は以下のサイトからご確認ください。（富岡）

市民と考える 吉田寮再生100年プロジェクト

エントリー スケジュール 募集概要 提案要件 吉田寮資料 (図面等) English ver. (under constr.)

京都大学吉田寮再生提案を募集します。 応募 締め切り 2018.9.13 Thu 必着

「歴史を残しつつ現代に活かした建築」と「より市民に開かれた空間」をテーマに、築105年の木造寄宿舎「吉田寮」の再生デザイン提案作品を募集。見学会や作品展示会を開催します。

応募概要 Submission Guide

こちらから募集要項のpdfデータを入力できます。

主催：「市民と考える吉田寮再生100年プロジェクト」実行委員会  
 後援：京大建築協会  
 協力：1983年に公開された「新報」の3つから吉田寮は成り立っています。

“なぜ吉田寮再生なのか”

吉田寮「現棟」は1913年（大正2年）に建てられた現存する日本最古の木造学生現建築です。これと、2015年に全面補修された「倉庫」、同年に新築された「新棟」の3つから吉田寮は成り立っています。

このうち、現棟は京都大学の学生寮として現在まで100年余の歴史を刻み残されています。しかし、築105年を迎え、現棟は老朽化による災害への耐性が懸念されており、京都大学は2017年

市民と考える吉田寮再生100年プロジェクトHP  
 < <http://yoshidaryo100nen.deci.jp/2018/> >

本ニューズレターPDFファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用してA4サイズ両面刷りに設定すればA5サイズの小冊子ができます。